

武庫川臨床教育学会 ニュースレター

2023.4.21 No.19



第17回研究大会が終了 — 44名の参加をいただきました



3月4日（土）に開催された、武庫川臨床教育学会第17回研究大会は、44名（対面30名、オンライン14名）の参加者が集いました。たくさんのご参加・ご協力ありがとうございました。様々な感想も寄せられていますので、主に3つの観点（企画・立案、参加・組織、当日の運営・感想）から大会を振り返ってみます。

9本の自由研究発表（当日1名の辞退があったため8本）は非会員の方からも新鮮な報告があり、あらたな学びにつながりました。シンポジウムは3人の登壇者の話題提起が具体的で興味深く、参加者それぞれが自分と臨床教育学との関係を考える場になりました。丸山講演はリアルな現地の様子を聞くことができ、ウクライナ問題について深く考えさせられました。会員組織に関しては、会員以外の方にも積極的な呼びかけをした結果、例年に比べて初参加の方が増えました。当日のハイブリット開催についても、武庫川女子大学の助手の方の協力によってスムーズに進行することができました。以下、いくつか感想を紹介します。

自由研究発表

- ◆ 少人数ながら、活発な意見交換が行われました。本学会に特有のアットホームな雰囲気と臨床に向き合う問題意識の高さが伝わってくる場となっていたように思います。
- ◆ 発表が2本になったが討議の時間が増えて、ゆっくりと話し合うことができました。一見すると全く違うジャンルの発表のようだったが、様々な課題を抱えた子どもたちの支援について「共通項」があるという点で、興味深い話でした。

シンポジウム

- ◆ 昨年10月の日本臨床教育学会でのシンポジウムを含め、研究者も当事者であることを考えさせられており、ご登壇の先生方の研究者としてのあり方や生活者としてのあり方などが絡み合っただけの臨床教育学に対する姿勢に学ぶことができ、大変意義深かったと思います。
- ◆ シンポジストの一人として、楽しい時間を過ごせました。お互いに普段とは違う側面を垣間見ることができたように感じ、あらためて自己理解・他者理解の大切さを確認する体験となりました。

武庫川臨床教育学会
<http://mukogawarinkyo.com/>

〒663-8558
兵庫県西宮市池開町 6-46
武庫川女子大学教育研究所内

電話番号: 075-922-7749（吉益自宅）
メール: mukogawarinkyo@yahoo.co.jp

シリーズ：私と臨床教育学⑬

子どもを「対象」にせず、共に生きる「相手」として尊重する

石本 日和子（相愛大学）

1983年に小学校教師になった。ミニスカートにソバージュヘア、お茶くみ拒否の可愛げのない、わきまえない女だったので「教師に向いていない」と総スカンだった。しかも、授業が下手で、学級経営も出来ない。放課後、毎日、教室の黒板の前で授業の練習をしたが、すればするほど不安は募る。用務員さんに追い出されるまで学校にいて、泣きながら帰った。

今だったら、辞めるしかなかったと思うが、当時は「先生が子どもと暮らしながら、先生になっていく」文化があった。いつまでも消えない教師の電気を心配して、学校が見えるお家のお母さんがおにぎりを持ってきてくれた。先輩教師たちは「遊べ」と教えてくれた。校長も「遊べ」と言った。変な新任が、下手な授業をして学級が荒れるより、子どもと機嫌よく遊んでくれる方が、気が楽だったのだろう。

武庫川の河原で、段ボールそりで遊んだ。楽しくて、夢中で遊び、やっと子どもたちの中に入れてもらった。学校に帰る道すがら、彩ちゃんが手を握ってくれて「先生は、机のところまで来て、分かる？って聞いてくれるやろ、だから、彩はがんばろって思うねん」と言ってくれた時の嬉しさは、今も胸の中にある。子どもたちを一齐に指導する技術のない情けない教師だけれど、一人の子どもの「先生」と呼びかける声には応えられる。そういう教師として、歩んでいこうと思った。

学校をめぐる状況は、1990年代から大きく変わり、兵教祖の委員長が兵庫県の「人づくり懇話会」の議長になったり、日教組が「教え子を戦場に送らない」と言わなくなったりしたあぐく、組合が分裂した。「ゆとり教育」で、ゆとりって何？と考える間もなく、47教育基本法が廃止され「全国一斉学力テスト体制」になった。

短い文章で乱暴に書くのは危険だと承知だが、私的な実感として許していただければ「乱暴で急激な教育破壊」だった。あの彩ちゃんが、学力やコミュニケーション能力や様々な〇〇力に分析されたデータになっていく。許せなくて、教師だけではなく、子どもや保護者や市民とともに、街頭でピラをまいた。

学校と組合と市民活動で睡眠時間4時間が続き、47教育基本法が廃止された年、私は、教室にたてなくなって、半年間療養した。

私から、子どもと教育が去っていく。職員室で語られる言葉が分からず、荒れる子どもが私に向ける刃におびえた。しかし、一方で、納得できない状況で、危機にさらされているのは、私だけではないのだから、私の自己を抑圧される感覚を、何とか表現し、そこからもう一度子どもと生きる方法を考えなくてはならないと思った。

私は教育科学研究会で、私の小さな実践を語り始め、子どものリアルな良さを切り取ったエッセイを書いた。田中孝彦先生に、武庫川大学でハーマンを学ぶことができたこともありがたかった。

私は、臨床教育学を学ぶことで、生きのびたと言ってよいと思う。小学校教師という仕事を魅力的に豊かに生きることが、ひどく厳しい時代が続いている。しかし、私の前には、厳しい時代を共に生きている子どもがいる。子どもと話し、子どもと悩み、子どもと未来を考えることをあきらめなければ、希望の兆しはある。子どもを「対象」にせず、共に生きる「相手」として尊重する臨床教育学の軸をゆるがせない覚悟を持ち続けたい。



編集後記

▶第17回研究大会の特集・まとめです。大学院で学んだ臨床教育学とは何であったのか、それが今を生きる自分とどうかわるのか、きわめて根源的な問いを改めて考えるきっかけになりました。▶小さな学習会の福井さんの問題提起、石本さんの寄稿文からも深く考えさせられました。▶次回の小さな研究会でみなさんとの出会いを楽しみにしております。<文責：吉益>